

## 第5回新潟地域看護研究会を開催しました

テーマ

## 「保健師の実践を可視化する」

2019年10月5日(土) 10:00~12:00

場所: 新潟大学医学部保健学科

保健師には複雑化する保健福祉ニーズへの対応、効果的な保健福祉施策の展開、地域包括ケアシステムの構築など多様かつ高い専門性が求められています。地域看護専門看護師(地域看護 CNS)は、これらの課題への対応や人材育成等に寄与する高い実践能力をもつ保健師として活躍が期待されています。

第5回新潟地域看護研究会では、質の高い豊かな保健活動の実践を目指し、地域看護 CNS として活躍されている大阪府高槻市の保健師 新家静さんからご講演いただくとともに、『地域に根付いた地域看護 CNS の活用が活動を豊かにする』をテーマにパネルディスカッションを行いました。

新潟県内の行政機関、地域包括支援センター、保健師を目指す学生など42名の皆様にご参加いただきました。

## 講演 保健師の高度実践を可視化する

講師: 大阪府高槻市子ども保健課 保健師(地域看護 CNS) 新家 静 氏

## 地域看護 CNS (以下、CNS) を目指したきっかけ…

新家さんが CNS を目指したのは、保健師5年目に難病担当をしていた時に保健師としてどう患者に関わったらよいか、何ができるのか悩み、“もう一度看護を学びたい”という思いからでした。

『大学院で公衆衛生看護や個別支援の基礎となる理論・方法論学び直すこと、また、CNSの「高度実践」、「倫理調整」、「コンサルテーション」、「連携調整」、「教育」、

「研究」の6つ能力を高めるために、その視点で実践を分析・考察し、記述するトレーニングをすることで、理論と実践を結び付けて活動する力が高まり、エビデンスのある、再現性の高い活動ができるようになったと同時に、保健師の実践を他者に伝える力も高まったことを実感している』と大学院で学び、CNSを取得した効果についてお話しくださいました。



## 『高度実践の可視化』という側面からみた CNS の実践活動…

CNSの実践活動の一例として、医療機関受診に結びつかない「特定妊婦」の家族に行った支援過程についてお話しいただきました。

☞事例の概要 \*個人情報保護のため詳細は省略

家族の信念により医療受診を拒否している「特定妊婦」。「医療のもとでない出産は危険」という支援者側の価値観と「医療のもとでの出産が安全ではない」という家族の価値観が対立し、倫理的葛藤が生じていた。そこで新家さんが『倫理調整』を行った事例。

### ✿新家さんの実践✿

**対象者との関係づくり** まずは「自分（保健師）を受け入れてもらうこと」、「相手の価値観、思いを知ること」に主眼を置き、何度も家庭訪問を重ねた。最初は「受診」ではなく、家族が「今、一番困っていること」の相談に対応しながら、自らを受け入れてもらい、家族との関係性を築く中で、これまでの家族の生活過程や母親の出産・子どもへの思いを聴いた。そのプロセスを通し、新家さん自身の対象者への心象の変化と対象を深く理解することにつながった。

**家族と支援者間の倫理調整** 支援者側には「生まれてくる子どもの安全を守る」という使命感があり、医療受診しない家族と支援者との間に倫理的葛藤が生じていた。そこで支援者間で検討会の機会を設け、家族と支援者間で“何が”“なぜ”対立しているのか、支援者がとるべき行動は何かを明確にするため、サラT・フライが提唱した6つの倫理原則の枠組みを用い検討を行った。「支援者が進めたい支援」と「家族が望む出産」を選択した場合とで、倫理原則にもとづき、どのような状況（利益・不利益）が起こりうるか意見を出し合い、それを記述し、明確化していった。それによって支援の判断根拠が可視化され、双方が納得でき、根拠のある支援方針を導き出すことができた。

**具体的支援の実施** それを実現するための具体策として、救急搬送に備えた関係機関への調整、安全な出産に向かうための家族への支援など『連携調整』を行い、無事に家族が望む出産の実現と支援者も願った安全な出産を達成することができた。

**事例への関わりの経験をもとにした教育・研究への発展** 母子保健に関わる支援者間での対応を共有するための研修会の開催、また特定妊婦の判断基準にも疑問を持ち、特定妊婦の判断基準に関する研究にも取り組んでいる。

### 最後に… 保健師の実践の可視化はなぜ必要か

新家さんは、『素晴らしい実践をされてきた保健師は沢山いる。しかし、以前のように背中を見て学ぶ時間も余裕もない現在、その素晴らしい技術を伝承するためには、行った支援を言語化し後輩や上司に伝える、『可視化』が重要。また、近年、経済格差、健康格差が拡大し、人々の価値観はますます多様化している。保健師はそれに対応し、実践力を上げる努力を重ねる必要がある』と話し、実践を可視化することの意味を強調されていました。



活動を可視化することが活動のエビデンスになり、地域保健活動の質の向上につながることを実感した講演内容でした。

#### (参考書籍・文献)

- ・サラT.フライ、メガン・ジェーン・ジョンストン著、片田範子、山田あい子訳：看護実践の倫理【第3版】倫理的意思決定のためのガイド、日本看護協会出版会、2014.
- ・小西恵美子編：看護倫理 よい看護・よい看護師への道しるべ、南江堂、2010.
- ・坪倉繁美：具体的なジレンマからみた看護倫理の基本、日本芸術社、2005.
- ・看護職の倫理綱領：日本看護協会、[www.furse.or.jp/nursing/practice/rinri](http://www.furse.or.jp/nursing/practice/rinri)

### 質疑応答から…

- Q. スピード感を持って倫理調整を行うにはどうしたらいいか工夫等があれば教えてほしい。
- A. 調整したい事柄があるとき、全部自分が動くのではなく、どこ（誰）からアプローチしたら一番スムーズにいくかを周囲と相談し、適切な役割の方が動きやすいように調整を行うのも保健師の技術である。連携については普段から信頼関係を大切に活動する。例えば医療機関との連携では、医療機関が困っているときは、他の仕事を後回しにしても先に対応するなど、日々の関係づくりを大切にしている。普段の関係の積み重ねでスピード感が変わってくる。

### 講演をお聞きして… 参加者からの感想（一部抜粋）

- ・ 困難なケースに遭遇した時に倫理原則などのツールを用いて倫理調整し、言語化・可視化していくことが大切なんだなと印象に残りました。地域のケアの質が向上することがわかりました。
- ・ 事例検討や後輩からのケース対応への相談に対して、根拠をもった支援の方向性をアドバイスしていくための視点として倫理調整が参考になった。改めて学んでみたい。
- ・ 講演のテーマに興味をもち参加しました。実践していくなかで理論がベースとなり伝えていくことが自分の保健師として活動を充実させ、満足度も高くなるものと思いました。
- ・ 保健師活動の1つ1つで判断する・した過程を言語化するようにしたいです。



## パネルディスカッション 地域に根付いた地域看護 CNS の活用が活動を豊かにする

座長：新潟大学大学院保健学研究科 教授 小林 恵子

パネリスト：

▶地域看護 CNS 実践者の立場から

上越市人事課 保健師長（地域看護 CNS） 小林奈緒子 氏

新潟県人事課 主査（地域看護 CNS） 室岡 真樹 氏

▶地域看護 CNS コースの学生の立場から

新潟大学大学院保健学研究科地域看護 CNS コース学生（長岡保健所保健師） 今村 円香 氏

▶新潟県保健師人材育成担当課の立場から

新潟県医師・看護職員確保対策課 副参事 山田 洋子氏

## 地域看護 CNS としての実践活動とその効果

○小林氏：CNS として活動して6年目。日々、職場の保健師や他機関から寄せられる相談では、調整が困難だったというだけでなく「本人や家族の意向に沿った方向性だったか」などジレンマを抱えていることが多いため実践の場でも倫理調整や相談支援に取り組んでいる。それによって、他機関における倫理観の高まり、対象者の意志を尊重したケアの実践につながっているように感じる。



日本公衆衛生看護学会などで全国の保健師を対象に CNS の仲間と共に、倫理的課題とその解決方法を考えるワークショップなどに取り組んでいる。

○室岡氏：大学院や CNS の活動を通して「保健師とは何か」や「実践とは何か」を深めることによって、保健師としての“芯”（コア）が通った。人に説明するとき結論だけでなく理由（根拠）を端的にまとめて伝える力が付き、周りの人たちとの連携もスムーズになった。

CNS としての活動では、職場での実践のほか、「教育」として保健師向けの研修での講義や事例検討の助言等の活動の機会がある。県の保健師の自主グループにおいて、職場内外の個別事例の「相談」や、実践活動のまとめや「研究」により活動を可視しリフレクションにつなげることで身近な保健師の実践能力向上のサポート役となることを目指している。



○新家氏：CNS という保証された能力や役割があるという共通認識があることによって、医療者と対等に、同じ価値観を持って話が出来るようになり、病院関係者との連携がとりやすくなった。

○今村氏：保健師6年目。現在、働きながら大学院地域看護 CNS コースに通っている。これまで、保健師として数年が経過し、活動を通して様々な気づきはあっても、それを課題として整理し、周囲に発信し、実行していくことができないもどかしさを感じていた。大学教員との共同研究や学会参加を通して、「研究」の面白さを実感し、また以前行われたシンポジウム（H26年COC+事業）を聞き、CNSの方々が生き生きと活動されていることを知った。自分もCNSを目指すことで、現状を変え、保健師として成長できるのではないかと感じ、先輩の「変わりたいと思った時がチャンス」という言葉に後押しされ大学院に進学した。大学院では、様々な理論を学び、自らの実践に結びつけながらプレゼンや検討を行っている。現在担当している結核支援でも、大学院でCBPRを学び、服薬管理のみならず、患者と一緒に考える支援を意識するようになったことでより良い支援につなげられてきていると感じる。また、モチベーションが上がり、日頃の活動にも前向きに取り組むことができている。



○山田氏：CNSには県が行う新任期保健師研修の事前課題シート作成・改訂への協力、新任期保健師研修、県地域機関における保健師研修での指導・助言、その他保健師人材育成における相談対応等に協力していただいている。新任期保健師研修での指導では、CNSの専門性を生かし、受講者の能力向上に貢献するとともに、ファシリテーターとして参加している他の保健師にとってもCNSの活躍を実感する有効な場となっている。



☞追記 このような活動ができる基盤として、CNSは5年の更新制度があり、5年間にCNSとしての実績（ポイント制）を積み上げ、レポート課題を提出するなどのノルマがあること、そのような更新制度によってCNSの能力の向上や質保証がなされていることが紹介された。

### 地域看護CNSの活動（活用）の展望と課題

○小林氏 CNSとしては、活動の成果や役割モデルを実践の中で見せていく取組が求められていると思う。特に倫理調整におけるその役割は大きい。そのためには自身のCNSとしてのスキルアップと、地域看護CNSの役割を地域全体で認識してもらうよう活動していきたい。

○室岡氏 CNSとしての活動では、保健師の人材育成については県内でも研修体制やキャリアパスの検討等が進んでいる。このような検討への参画、研修の講師や助言者としてCNSを活用してもらうことで、CNSが在籍している職場内だけでなく、県全体の保健師の力量形成を後押しすることにもつながると考える。県あるいは市町村の人材育成部門へのCNSの配置、あるいは連携を図れる部署に配置することができるように組織としてCNSを認知・活用してもらえるとよい。

県の保健師として広域的に関われる立場にある反面、CNSの活動や活用方法が見えにくい。より活用されるためには認知度を高める必要があり、実践を伝え、見せることを続けるとともに、何ができるかを一緒に考える機会があると良い。

○新家氏 まずはCNSがいるということを活動の中で知ってもらうのが課題である。私たちCNSを地域の資源として使ってもらいたい。また、周りに活動を繋いでくれるCNSの仲間が増えてほしい。

○山田氏 CNSが後輩のロールモデルとなり、保健師の意欲向上やレベルアップにつながることを期待している。CNS活用に向けて、CNSコース進学者の増加、活動の可視化、職場や上司の理解が課題と考えている。県は、今年度作成した「新潟県における保健師人材育成体制図」にOff-JTとしてCNSコースを明記し、改訂する新潟県行政保健師研修でも、地域看護CNSを講師として活用することを明記するなど推進に努めている。まだCNSの活動が自治体で十分理解されていない場合があるため、CNSの活用を促進し、理解促進を図っていく必要がある。

○座長 地域看護CNSを育成する立場として、その魅力を皆さんに分かってほしい、実践を皆さんに還元したいと思い、事例検討会を企画し、職場で行う事例検討会とはまた異なる高度実践としてのロールモデルやコンサルテーションを実施してきた。事例検討会の記録を構造化し、HPや学会を通し全国に発信し可視化を図っている。大学としても引き続きCNSの活動とその効果を発信していきたい。



☞追記 「働きながら進学するために、どのように周りの理解や調整を行ったか」という質問があり、それぞれの経験についてお話しいただいた。

「まずは日々の業務をきちんと行い信頼貯金を増やす」、「上司や人事担当者に日ごろから相談しタイミングを伺った」、「人事担当者と交渉した方もいる」、「大学院の科目履修制度を活用し、1年助走期間をおいて入学した」など、職場の理解を得るための働きかけや、「県の研修制度を活用した」、「新潟県の修学資金の支援制度の活用（月5万円）」など就学を後押しする制度活用についても情報提供がされた。

### パネルディスカッションのまとめ

ディスカッションでは、以下の点が議論されました。

#### ▶現在地域看護 CNS の活動：

- ・ 職場内・外の個別の支援事例に対する『倫理調整』や『関係職種への相談支援』
- ・ 保健師向け研修での講義や事例検討会での助言、県が実施する保健師研修の課題シートの改訂への協力、受講者への指導・助言、その他人材育成に関する相談対応
- ・ 学会での「倫理調整」をテーマとしたワークショップ 等

#### ▶今後の展望と課題：

- ・ 今後、CNS としてさらに活動を強化していきたい内容として、「活動成果の可視化や保健師の役割モデルを示していくこと」、「自治体の保健師人材育成システムの検討への参画」、「研修講師としての役割」などが挙げられた。
- ・ そのためには、「CNS としての自身のスキルアップ」、「自治体の人材育成部門への CNS の配置」、「CNS への理解の促進」と「CNS の増加」が必要である。

#### ▶ディスカッションの最後に…

「CNS として地域ケアの質を高めていきたい」、「保健師が元気にしっかり力をつけて活動できるよう、CNS として支援したい」、「新潟大学には就業しながら学べる CNS コースがあることはすごく良い環境」、「新潟大学では、その人の都合に合わせた時間割を相談しながら工夫をして組んでいる。挑戦してみようと思う時がチャンス。ぜひ一歩進んでほしい。いつでも大学を活用してもらいたい」、「県としても、CNS を活用しながら活躍を支援していきたい」などの熱い意見が出されました。CNS と CNS を目指す保健師と教育機関、行政が協力して CNS の学びと活躍の道を広げ、新潟県全体の豊かな保健活動の実践と保健師の魅力の向上につなげていきたいという方向を示し、ディスカッションを終えました。

(齋藤智子)

## 参加者・アンケート結果

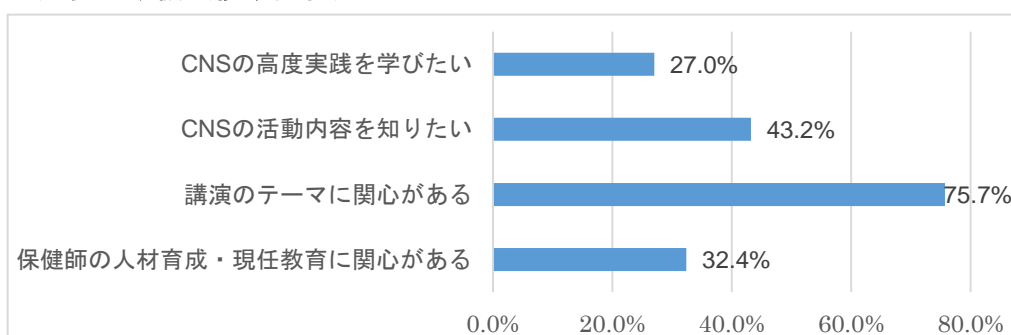
### 1. 参加者 参加者 37 名、講師 1 名、パネリスト 4 名、教員 5 名 計 47 名

参加者の内訳

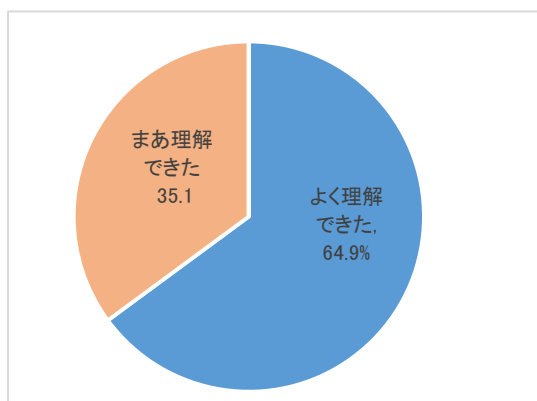
| 所属         | 人数 | 所属       | 人数 |
|------------|----|----------|----|
| 県保健師       | 6  | 学部・大学院学生 | 9  |
| 市町村保健師     | 25 | 新潟大学教員   | 5  |
| 地域包括支援センター | 2  | 計        | 47 |

### 2. アンケート結果（一部抜粋） n=37

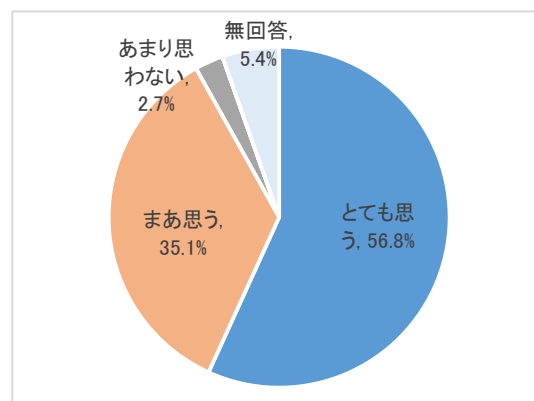
#### 1) 参加動機（複数回答）



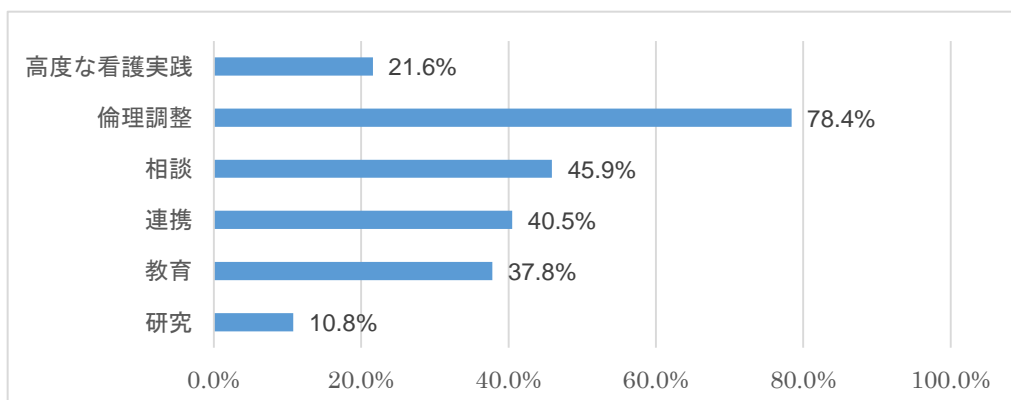
#### 2) 地域看護 CNS の活動への理解



#### 3) 講演・ディスカッションの実践への活用意志



#### 4) 地域看護 CNS を活用したいシーン（複数回答）



### 具体的なご意見やご感想（抜粋）

- ・日々たくさんの悩みや迷いを抱えながら仕事をしていました。CNSの方々からのお話をきいて、可視化、言語化の重要性を改めて感じ、今後、自分の意識すべきことがわかりました。
- ・CNSの皆さんの活動の素晴らしさを理解することができました。倫理調整をすることで、地域のケアの質が向上することがわかりました。
- ・このように前向きに取り組んでいるPHNの存在が身近にすることがわかり刺激になりました。実践の評価は、自分自身は少ないですが、後輩にはこの姿を見てもらいたいと思いました。
- ・人材育成の内容を再検討する機会になりました。
- ・CNSに後輩育成に支援をいただけることがわかった。今後、研修の講師依頼などを考えたい。
- ・日々、支援・事業で可視化が求められている状況で、CNSや大学へも相談しやすい体制があれば有難いです。
- ・元気の出る実践報告でした。

## 第5回新潟地域看護研究会を終えて

実習や研修で実践の場を見て、いつも思うことがあります。どの保健師さんも身を粉にして働き、住民のためと一生懸命で、私からは素晴らしい活動をされているのはよく見えます。しかし、保健師の活動は住民や関係者からは見えにくく、見えにくければ信頼を得ることは難しく、保健師を活用しにくいという、住民や関係者にとっての不利益があります。公衆衛生という公共性を考えると、焦点を当てた効率的な施策や活動を関係者と協働し、地域住民に向けて見えるように展開していかなければなりません。今回は「高度実践を可視化する」という難しいテーマでしたが、新家さんをはじめ、地域看護CNSの皆さんが見事に可視化に挑戦していることが学べた内容でした。

今後の課題としては可視化した保健師の高度実践のエビデンスを蓄積していくことであり、そこに私たち大学は大きくかかわっていく必要があると考えます。

参加して下さった皆様、今回のシンポジウムを参考に高度実践の可視化に挑戦していただけることを期待するとともに、その挑戦にこれからもパートナーとして、気軽にCNSや大学を活用していただければと期待しています。  
(小林 恵子)

2020年2月1日（土）に、第6回の新潟地域看護研究会として事例検討会を開催いたします。

皆様、是非ご参加ください。

(新潟大学大学院保健学研究科地域看護学領域)

主催：新潟大学大学院保健学研究科地域看護学領域  
共催：新潟県 公益社団法人新潟県看護協会  
全国保健師長会新潟県支部 新潟県職員保健師会  
後援：新潟市 全国保健師長会新潟市支部

新潟地域看護研究会

〒951-8518 新潟市中央区旭町通 2-746

新潟大学大学院保健学研究科地域看護学領域

TEL: 025-227-2399 (担当：齋藤)

Mail: chiiki@clg.niigata-u.ac.jp